

お元氣ですか

発行所 (福)横浜市社会福祉協議会
障害者支援センター
〒231-8482 横浜市中区桜木町1丁目1番地
横浜市健康福祉総合センター9階
☎045-681-1211(代表) ☎045-680-1550
🌐https://www.yokohamashakyu.jp/siencenter/
編集発行人 内嶋 順一

2026年3月 209号



横浜市 障害者支援センター 🔍 検索

障害者支援センターの
ホームページはこちら



泉 ふれあいシールラリー 実施しました!



泉区
マスコットキャラクター
いっすん
#4068

令和2年から始まり、今年度で6回目を迎えた泉ふれあいシールラリーが令和7年11月13日～12月12日の期間、泉区内の50事業所が参加して実施されました。

きっかけは令和2年のコロナ禍で、事業所と地域または事業所同士の交流や販路拡大に制限がかかったことです。

多くの人が一堂に集まれないなかで、障害サービス事業所の「日ごろの活動を知らしてもらいたい」「地域と交流することで利用者の社会参加につなげたい」という2つの目的を叶えるイベントとして、シールラリーが誕生しました。

年を重ねるごとに地域に定着した秋の風物詩的なイベントとなっているようです。

今回は昨年実施されたシールラリーでの事業所それぞれの参加の様子を特集します。

参加事業所一覧

2025/11

泉ふれあいシールラリー

てくてくたんけん

シールラリーマップを見て障害福祉事業所へ行ってみよう

主催 泉福祉保健センター高齢・障害支援課 泉区社会福祉協議会
泉区障害福祉自立支援協議会

お問合せ 045-800-2430
(泉福祉保健センター高齢・障害支援課)

泉ふれあいシールラリー担当 泉区高齢・障害支援課 障害者支援担当 岡野係長に伺いました

当初からの目的である「障害分野の事業所の地域での普及啓発」「利用者の社会生活の参画」を主軸に、毎年工夫を加え第6回まで続けてきました。最初はA賞、B賞だった賞の名称も「もぐもぐチャンス賞」「てくてくチャンス賞」等と回を追うごとに趣向をこらし、昨年度からは全ての事業所を踏破して抽選に参加できる「コンプリート賞」も設置しています。

買い物だけではなく、地域の事業所を知ってもらうために、事業所に立ち寄っていただくだけでもシールラリーに参加でき、普段の生活でなじみのなかった場所にも立ち寄りきっかけとして活用いただいています。

今後は、障害福祉事業所やグループホームの数が多いという泉区の特徴を更に活かして事業展開していけるよう、区内の事業所のみならずとも一緒に取り組んでいきます。

自慢のマドレーヌ



わいわいクラブ



秋はマドレーヌがよく売れるそうです。ずっと同じ味を作り続けていくことを心掛けているとのこと。シールラリーは秋の定番となっていて楽しい、とメンバーさんも心待ちにしている様子でした。

シールラリーやってまーす

いずみ福祉作業所 ゆう

喫茶メニューのほか、自主製品の刺し子等の布製品の販売でシールラリーに参加しています。刺し子は縫い手の個性があらわれる作品が多く、固定ファンもいるとのことでした。

一針づつ丁寧に



参加賞は非売品!

みんなでバスボム製作



「とにかくお風呂に入れてみて!!」

トムトムの家

今回シールラリーに参加賞として自主製品のバスボムを提供しました。トムトムの家のバスボムは乾燥ハーブやお花を使ったやさしい香りが特徴です。「トムトムのバスボムで1日の疲れをいやしてほしい」とのコメントをいただきました。

障害者地域活動ホームいずみ会館

自家栽培の月桂樹の葉を乾燥させて無農薬の乾燥ローリエを作っています。摘み取り→洗浄→乾燥→袋詰め→ラベル貼りのすべての工程で通所メンバーが関わって作製しています。シールラリーを通して売り上げも伸びているそうです。



ローリエののぼり旗でPR

手作り無農薬のローリエ



自慢の手作りカレーと丼ぶり



シールラリーの景品はクッキーです

ガーデンキッチンぶどうの樹

スパイスから手作りのカレーと丼ぶりが自慢のお店です。シールラリーのマップを見て来店していただけるお客様が沢山いらっしゃいました。店舗での接客を通して楽しくお客様と交流しています。

スコップ泉

平日の外出活動としてシールラリーに参加しました。行く先々の事業所で何を買おうか悩みながら気に入りの小物やお菓子を購入。楽しいひとときになったようです。

シールラリーで訪問しました!



泉区
マスコットキャラクター
いっすん
#4068



障がい理解啓発グループ KoKua 人はみんな違うけど、感じる気持ちは「みんないっしょ」

KoKua(コクア)は横浜市南区の「障がい児者の将来を考える会『泉の会』」から発足した知的障害者の親による障害理解啓発グループで、動画やプログラムなどを作成し、地域や学校などへの出前講座を実施しています。そんなKoKuaのみなさんに活動についてお話を伺いました。

▶ 活動を始めたきっかけ

東日本大震災のときに避難所に行けず車の中で過ごした障害者がいたということを知り、障害のある人についてもっと知ってほしい、地域の中に障害のある人がいることを知ってほしいという思いから始まりました。

▶ 活動の中で伝えたいこと

やりたいなと思っているのに、やらなくてはいけないと分かっているのに、苦手だな、嫌だなと感じる事は誰でもあると思います。何に対してどう感じるかはみんな違うけれど、「感じる気持ち」はみんな一緒。単に「障害」を伝えるのではなく、こういった気持ちを共有することの大切さや、人はそれぞれ違うから、相手をよく見て、相手を知り、違いを知って認め合うことの大切さを伝えています。

一方、障害があるからといっていつも助けが必要というわけではなく、できることもたくさんあること、工夫次第でできることが広がることも知ってほしいと思っています。本当は本人達に来てもらって話してもらえると良いのですが、難しいので身近に感じてもらうため当事者の日常を撮影して、動画を作成しました。



▶ 講座を聴いた方の反応は

講座を聴いてくれた方の中には「今まで気になっていたけど何もできなかった」と感想を言ってくれた方がいました。「気にかける」それだけで十分なのです。知った上で積極的に見守ってほしい。気にかけてくれてありがとうと伝えました。

▶ 今後の皆さんの活動は

今後力を入れていきたいことは、今までの取組に加え、KoKuaからの提案として、地域防災拠点の関係者をはじめとする地域の皆さんに避難所マップ(避難所の全体図)、ピクトグラム(意味概念を理解させるための簡単な図)、スケジュールボード(避難所の予定を表したもの)の有効性を伝えていきたいです。実は障害者に分かりやすいということは、高齢者にも、外国人や子どもにも分かりやすいということなのです。

将来、障害のある人もない人も地域で共に過ごしていくなかで、私たちの活動自体が必要なくなる社会になることが理想です。



🔭 望遠鏡



脳性マヒの当事者運動に限って言えば、担い手は私も含めて高齢化している。言い換えれば、若い世代の運動への関心が希薄になっているということだ。状況が改善されて運動が必要ないのであればそれでいい。しかし、昨年の「長生村事件」は、55年前の神奈川「青い芝」の運動を大きく転換させた金沢区の事件を思い起こさせる。街はバリアフリー化し、福祉制度は以前よりは整った。しかし、私たちは本当に共生しているのだろうか。

そんな観点から、小さな本を出版させていただいた。神奈川人権センター発行「神奈川の障害当事者運動を振り返って～脳性マヒの立場から」。ご一読いただきたい。

一般社団法人REAVA 渋谷治巳